

# 建設の碑

彌彦神社事件の碑

## 戦後最悪の群集事故

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
江口知秀  
Tomohide Eguchi

彌彦神社（新潟県西蒲原郡）の拝殿前は、回廊で囲まれた広場となっていた。杉や樺が茂る境内の森にひらけた一、三〇〇〇平方メートルほどの広々とした空間で、一面に白い砂利が敷かれており、越後国の一宮にふさわしく青空の下に清々しく映えていた。ここで戦後最悪の群集事故が起こったとは、まったく信じ難かったが、昭和三十一年元日の悲劇を境内の「桜苑」内に建てられた石碑は語っていた。彌彦神社では、事件の前年から元日の午前〇時に、拝殿前から広場の参拝客へ紅白の餅をまく行事を始めていた。これは予想以上の集客効果を博したが、餅を奪い合って土足で拝殿に上がり込むなど、不埒な所業におよぶ者がいたため、広場の正面入口にあたる随神門の両翼に櫓を組み、その上から餅をまくこととなった。この変更が最悪の結果を招いた。

昭和三十一年の元日〇時、火花を合図に随神門の櫓から餅まきが始まると、拝殿前の広場にいた約八、〇〇〇人の参拝客が、いっせいに随神門に押し寄せ大混乱となった。そして餅まきが終わると、参拝客は我先に随神門前の石段を降りて参道へ向かおうとしたが、折悪しく、臨時電車を降りて拝殿へ向かう後続の集団が、このタイミングで石段下へ次々と到着し、上へ下への押し合いとなった。その結果、圧

力に耐えかねた人々が、石段途中で雪崩のように倒れこみ、さらに、石段上の随神門前に設けられた踊り場の玉垣が、群集の圧力によって崩壊すると、支えを失った人々は二・五メートル下の地面へ次々と転落して、高さ二メートル以上の人の山ができたという。一年の幸せを願うために集った人々は、突発した群集事故に巻き込まれ、なんと一二人もの命が失われた。随神門前の石段の踏面は広く、勾配もゆるやかで、普段であれば転倒事故など、まず起こらない。拝殿前の広場も八、〇〇〇人以上の人々を収容できる広さを持っている。この事件は、参拝客が集中した元日〇時に、石段上の随神門前で餅まきを行ったことが引き金となった。また最大の原因は、拝殿前広場への出入り口は随神門の他二カ所あったにもかかわらず、一方通行の規制を行わなかったため、双方からの群衆が、石段という非常に危険な場所で衝突してしまっただけだ。

こうした群集事故を防ぐためには、導線上の階段や幅員の減少など、ボトルネックとなるような箇所を、設計計画段階でできる限り排除する必要があるが、彌彦神社事件が物語るようにそれだけでは不十分であり、イベント等を開催する際には、群集密度を高めないように運営面での対策も練らなければなら

ない。さらには、イベントに集まる一人一人も混雑の状況を判断し、様子を見るときか、場合によっては引き返すなど自衛をはかるべきかと思う。いったん不測の事態が起きてしまえば、他者に責任を求めずても取り返すはつかない。彌彦神社事件の碑に刻まれた「事由を誌して永く後人の戒めとなさん」の願いは、これら三者が一体となってはじめて成されるのだ。



彌彦神社事件の碑

[交通] JR弥彦(やひこ)駅より徒歩約10分  
彌彦神社境内の桜苑にある

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。